

個に応じた実践的な教科指導法に関する研究

- 中学校 国語 -

福 士 和 久¹

生徒に基礎・基本を確実に身に付けさせるためには、国語科の3領域1事項の調和を図りながら、「個に応じた指導の充実」を図ることが必要である。また、学習指導要領に示す内容をより発展させた学習を行う場合にも、各生徒の状況に応じて、個に応じた指導が必要になる。本研究では、ITを活用したものと、グループ学習を中心とした授業形態で、生徒の実態に即した、一人の指導者でできる実践的な指導法の工夫を目指した。

はじめに

文部科学省のホームページを見ると、「子どもたちが学習内容を確実に身に付けられるようにするためには、子どもの能力・適性、興味・関心等を十分に理解し、それに応じた指導法を工夫することが求められます。そのためには、それぞれの指導の場面に依りて、従来からの一斉指導に加えて、個別指導やグループ別指導、学習内容の習熟の程度に応じた指導、補充・発展的な学習や課題学習、繰り返し学習など、効果的な方法を柔軟かつ多様に導入することが重要です。」(文部科学省 HP「確かな学力」についてのQA「個に応じた指導」を充実するためには、どのように指導方法の工夫を行えばよいでしょうか。)とあるように、ここでは「個別指導やグループ別指導、学習内容の習熟の程度に応じた指導、補充・発展的な学習や課題学習、繰り返し学習」などが指導形態として挙げられている。

中学校国語の個に応じた指導法として、小集団学習やチーム・ティーチング等の形態の利点を生かした方法などが考えられる。これらは数学科や英語科で行われていることが多い。しかし、国語科では、小集団学習やチーム・ティーチング等はあまり実施されていないようである。そこで、本研究においては、一斉授業を補う、一人の指導者でクラスの生徒全体に個に応じた指導を行うことができる指導法の工夫を試みた。

研究の目的

本研究は、平成17年度の調査研究事業「小・中学校における教科指導法の研究」の一つとして、中学校の国語において、個に応じた教科指導の一層の充実を図る必要から、発展的な学習や補充的な学習を踏まえた多様な学習形態、指導体制を工夫した教科指導法を展開することで、児童・生徒の学習内容の確実な定着を図ることを目的としたものである。

そこで、中学校国語で個に応じた授業を行う際に、

現実的である指導者一人で指導ができる実践的な教科指導法の工夫を目指した。

研究の内容

1 中学校国語での個に応じた指導

実際に各中学校で活用しやすい授業形態を考え、学習指導案を作成し、検証した。この調査研究事業には、調査研究協力員3名が参加している。

授業形態としては、LANを使って俳句を作るというITを活用して個に応じた指導を実現した事例と、グループ学習を中心に据えてその構成員の学びあいから学習の理解を深める事例である。

グループ学習では、授業の中で、特に指導上で手だてが必要な生徒がいる場合には、教師が個別に指導ができるスタイルを考えた。

2 ITを活用した例(LANを使って俳句を作る)

(1) 単元名 ところをつなぐ「俳句の世界」

(2) 単元の目標

- ア 言葉の美しさ、豊かさについて考えを深める。
- イ 俳句のきまりと、その世界のとらえ方について理解する。

(3) 単元設定の趣旨

ア 従来からインターネットを活用して、「季語」調べや鑑賞のための作者調べ等が行われていると思う。これらは、図書室に蔵書の少ない「歳時記」や「類義語辞典」の代わりとして有効である。しかし、この使用法は、一方向であり、他の生徒から刺激を受けることは少ない。

そこで今回は、コミュニケーション手段としてLANを活用して、他人の創作活動を援助したり、他人の作品を評価したりというように、一方向から双方向のIT活用になることを目指した。

イ 日本文化の中で、詩歌は大きな役割を果たしている。これらの中心をなすものが、「短歌」であり「俳句」である。そこには、言葉や表現技

1 研究開発課 研修指導主事

法の奥に秘められた作者の思いや感性が存在している。そして、その言葉のもつ力や独特な表現技法、作者の鋭い感性と認識を理解し、生徒自身の表現活動に結びつけることを目指した。

(4) 指導計画 - 8時間扱い

ア 第一次(2時間)

教科書本文を通読し、俳句の概要を理解する。

イ 第二次(3時間)

(ア) 言葉の美しさ、豊かさについて考えを深める。

(イ) 筆者の鑑賞の視点をつかみ、鑑賞文を書く。

ウ 第三次(1時間) <本時>

自分の体験を俳句を通して表現する。

エ 第四次(2時間)

(ア) 完成した俳句作品と画像をあわせて発表の準備を行う。

(イ) みんなの作品を鑑賞しあう。

(5) 本時の目標

俳句の創作活動を通して、自分の気持ちの中心をとらえ、言葉のもつ力について理解を深める。

(6) 本時の展開

ア 文化祭終了後に書いた、短作文を読み返し、季語になりそうな部分に線を引く。

イ 季語のフォルダに登録されたHPにアクセスし適切な季語を探す。

ウ 季語が見つからない生徒は、LANのメールを使用して、求める季語のイメージを他の生徒に送る。

エ 一回目の俳句を完成させる。LANで、サーバーに送り、皆で批評しあう。

(7) 本時の支援の際の留意点

LANを活用して、印象的な季語に結びつくように個別に助言する。また、自分で使う季語を見つけた生徒には、その季語が相応しいか、他の生徒に個別にメールで参考意見を求める。以前に作成した短作文から気持ちの中心を残すように言葉を選ばせる。完成した俳句を保存するフォルダの確認を行い、確実に保存させる。

(8) 本時の評価について

印象に残っている季節感や感情を明確にして、季語を探すことができたか。その季語を使って、俳句を作ることができたか。また、作品を読みあい、自分の表現の参考にできたか。他人の俳句や季語に、コメントを出すことができたかなどを評価する。

(9) 個に応じた指導について

このITを活用した学習においては、次の視点を踏まえながら指導を行った。

ア 生徒の学習状況に応じて、生徒の学びを支援するために、各生徒にメールを送り指導する。

イ 個々の取組の差が大きいので、早くできた生徒には、他の生徒の支援に回れるようにし、相互の学びあいができる体制をつくる。

ウ 俳句の発表会を行い、相互の評価を踏まえて、作品を推敲する時間を設け、さらに俳句への理解を深める機会を設ける。

(10) この事例について

従来、普通教室で行っていた俳句の創作を、今回は、個に応じた指導を行うために、コンピュータ教室でLANを活用した授業で取り組んでもらった。

俳句を作ることは、生徒は初めての経験であったので、以前に行われた文化祭の時に書いた作文を基にして、どこに感動の主体があるのかを確認させ、それをベースに俳句を制作するスタイルをとってもらった。

季語はインターネットを活用して探した。また、早く俳句ができた生徒には、まだできていない生徒の支援に回ってもらい、メールで、季語や俳句の表現などについて、相談にのってもらった。

指導者は、クラス全員の学習の進み具合に注意を払いながら、学習のあまり進んでいない生徒に、メールを使ってアドバイスしたり、また直接机間指導したりした。

その結果、以前ならば授業時間内に俳句が完成しない生徒がいたが、今回は全員が作ることができた。また、季語や俳句に使われている言葉も、例えば、「新涼を肌で感じる朝の道」などのように、よく推敲されたものが多くなり、ITを活用したこの授業の有効性が実感できた。

3 グループ学習の例1(「平家物語」の群読をつくる)

(1) 単元名 古典に親しむ「敦盛の最期」

(2) 単元の目標 古典に表れた人々の思いや言葉のリズムを味わい、進んで古典に親しむ。

(3) 単元設定の趣旨

ア 古典に表れたものの見方や考え方について理解し、古典をより身近なものにしていく。

イ 音読や朗読活動を行い、言葉の表現相互の関係を理解する。

ウ グループの活動での自己の取組を大切にする。

(4) 指導計画 - 8時間扱い

ア 第一次(1時間)

(ア) 古典や「平家物語」の学習への関心をもつ。

(イ) 「平家物語」の知識を発表しあう。

イ 第二次(3時間)

(ア) 歴史的仮名遣いに注意しながら音読し、古典の口調に慣れる。

(イ) グループごとに「敦盛の最期」を群読する。

ウ 第三次(1時間)

(7) 場面の状況や登場人物の心境を考える。

エ 第四次（3時間）

(7) 発展学習として「扇的」を紹介し、音読の練習やグループごとに群読を行う。

(イ) 「敦盛の最期」か「扇的」を選択して読みの練習を行い、読み方の工夫をする。

(ウ) 群読の発表会<本時>

(5) 本時の目標

繰り返し音読し、古文の口調に慣れる。また学習への取組状況に応じて読む分量を考慮し、声の重なりを工夫し群読に取り組む。また他のグループの発表を聞きながら相互評価をする。

(6) 本時の展開

ア 「平家物語」の冒頭の文章を全員で音読する。

イ 発表会の前に練習時間を15分設ける。

ウ 発表会を行う。

エ まとめとして、指導者が講評を行う。

(7) 本時の支援の際の留意点

歴史的仮名遣いの確認と、七五調のリズムとともに、前半の漢語の響きと後半の和語の響きの違いを理解させる。また、擬態語、擬音語などの言葉の切れ目などに留意して読めるようにする。会話の場面については、それぞれの言葉が誰の言葉であるのかを把握させる。読み方の曖昧な生徒がいるグループには、一緒に声を出して読み、間違わずに読めるまで指導する。各自のグループが自分達の発表を中心に行うことは当然だが、他のグループの発表もしっかり聞き、評価用紙に記入させる。

(8) 本時の評価について

声の大きさ、読みの正確さ、発表の態度、全体のまとまりなどを評価する。

(9) 個に応じた指導について

このグループ学習においては、次の視点を踏まえながら指導を行った。

ア グループ内における個々の学びあいへの支援を、個に応じた指導に結びつける。

イ グループ間の相互評価によって、個々の取組が大切であることを認識させる。

ウ 各グループの学習状況を踏まえた柔軟な指導や適切な支援の仕方を追究する中で、個に応じた指導の展開を図る。

(10) この事例について

群読を取り上げる場合は、グループ学習になることが多いと思う。その中で、個に応じた指導を行うために、上記のような視点を意識して実践してもらった。

指導者一人では、クラスの全員に個に応じた指導を行うことは不可能である。それを補うために、グループ内での個々の学びあいが活発になる

ような支援を心がけてもらった。

例えば、あるグループは、リーダーシップをとる生徒がなかなか出なかったために練習が停滞していた。そこで、指導者には、このグループに積極的に声掛けを行ってもらった。また、控えめな生徒が集まったグループには、他のグループの活動を参考にさせ、大きな声を出させる指導をしてもらったところ、最後には、動作なども交えながら群読の発表をすることができた。

このように、グループ活動も個に応じた指導の視点から捉え直すと、十分に効果的である。

4 グループ学習の例2 (意見文の制作)

(1) 単元名 考えを伝えあう 「意見文を書こう」

(2) 単元の目標

ア 自分の思いや考えを意見として明確にし、人に伝えようとする意欲をもつ。

イ 読み手を意識し、書き方を工夫する。

ウ 自分の意見と他の人の意見との相違点と共通点とを捉えることができる。

(3) 単元設定の趣旨

ア 生徒が書く文章は、思いは表現されても、それを支える根拠が明確でないものが多い。

イ 自分の考えを「意見」として確かなものにしていく過程を大切にする。

ウ 自分の「意見」を明確に伝えるために、「反論」と「反論に対する答え」を書かせる。

エ 個人で「反論」を想定するのではなく、グループでお互いに「反論」を考えあう活動を取り入れ、「意見」に客観性をもたせる。

(4) 指導計画 - 6時間扱い

ア 第一次（1時間）

「本当のバリアフリーのために」を読み、例文を参考にして「意見」と「事実」を明確にした文章の構成について考える。

イ 第二次（1時間）

「意見文」として書くことができそうなテーマを探し、自分の意見について、なぜそう思うのか理由を考えて書き出す。

ウ 第三次（1時間）<本時>

自分の意見とは異なる意見、反対の意見を想定し、それに答えるための自分の意見を考える。

エ 第四次（2時間）

これまでの学習内容を踏まえて、読み手を意識して文章を書く。

オ 第五次（1時間）

お互いに文章を交換して読みあい、感想を交換して、自分の意見を再構築する。

(5) 本時の目標

ア 自分の意見に対する反論を想定する。

イ 反論に対する自分の意見を、理由を明確にして書き出す。

(6) 本時の展開

ア 前時に考えた自分の意見と理由を発表しあう。

イ お互いに意見と理由について質疑応答する。その際、ワークシートを使用し、出された賛成意見や反論、及びその反論の理由を書き留める。

ウ グループで出された反論に対する自分の答えを考え、ワークシートに書き込む。

エ 書き込んだ答えを出しあい、反論に答えるものになっているか、お互いに確認しあう。

オ 自分の意見、それに対する反論及び反論に対する自分の答えをワークシートに整理する。

(7) 本時の支援の際の留意点

ア 討論に持ち込まず、質疑応答に止める。

イ 反論だけでなく、賛成意見も出し合うこととし、それを自分の意見を補強する材料にさせる。

ウ ワークシートの書き込みの様子を観察し、個に応じた助言や支援を行う。

(ア) 反論に対する答えがでない生徒には、反論を整理し、その答えを書くように促す。

(イ) 反論は書けたが、根拠が明確でない生徒には、客観的な事実をあげて反論するよう助言する。

(8) 本時の評価について

ア グループでの話し合いを参考に、自分の意見に対する反論を想定することができたか。

イ 反論に対する自分の答えを、理由を明確にして書くことによって、自分の意見をより確かなものに深めることができたか。

(9) 個に応じた指導について

この学習においては、次の視点を踏まえながら指導を行った。

ア 個に応じた指導の前段として、グループ活動による相互の学び合いを導き出す。

イ このグループ活動で、活動があまり進まないところについては、個別に指導をしていく。

ウ 意見文を発表しあい、そこでの相互の評価を踏まえて個人で作品を推敲する時間を設け、個別に指導し、意見文の内容を深める。

(10) この事例について

指導者には、生徒に、自分の意見をもつだけでなく、自分の意見に対する反論まで想定させることによって、意見に客観性をもたせ、自信がつくように指導してもらった。そのことにより、グループ内での意見交換が活発に行なわれるようになって考えた。

この相互活動を取り入れることにより、生徒は自分の考えを広げることができ、さらに、違った意見に接して意見文の内容を深めることができた。

また、あまり質疑応答が進まないグループについては、意見を簡単に要約することと、その根拠を提示し、それを踏まえて反論を考えることを指導してもらった。

その結果、ほとんどの生徒は、根拠のある自分の意見を持って、個に応じた指導ができた。

研究のまとめ

この研究では、中学校の国語科において、個に応じた指導をいかに行うのがよいか、実践例を通して考察した。その結果、指導者が一人で、クラスの全体の生徒に対して、個に応じた指導を行う場合には、まず IT を活用することが有効であることが分かった。

しかし、現実には、コンピュータ教室等が使用できない場合も多いと思われる。そこで、次には、普通教室でのグループ学習を考えた。グループの構成メンバー相互の学び合い活動を中心に据えて、その上で、指導者が生徒個人の支援をする方法が有効であることが分かった。

なお、その際、各自が学べるワークシート等を活用して個人の学びの進み具合を捉えやすくし、それを指導に生かす手だてを講ずることが有効である。

これらの指導によって、生徒相互の学び合いが生まれ、発展的な学習にも対応できる。また、学習の進み具合が十分でない生徒に対しても、指導者が直接・間接に支援することが可能になるものと考えられる。

おわりに

現実的な場面を想定し、中学校国語における個に応じた指導として、指導者が一人でクラス全体に行えるものを考察した。その結果が上記の三例である。すぐに活用できる例である。調査研究協力員には、お忙しいところ、本研究に御協力戴き感謝申しあげる。

[調査研究協力員]

横須賀市立大津中学校	建部 陽子
小田原市立鴨宮中学校	情野 久美子
南足柄市立南足柄中学校	村田 哲

引用文献

文部科学省 HP 「個に応じた指導」を充実するためには、どのように指導方法の工夫を行えばよいでしょうか。(「確かな学力」についての QA)
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku/faq/001.htm (平成 17 年 12 月 5 日取得)

参考文献

工藤文三 2005 「「個に応じた指導」を实践から学ぶ」(『教職研修』1 月増刊号) 教育開発研究所